

過去の結果継続性を表すテイタ形の ポルトガル語訳

——日本語とブラジル・ポルトガル語における

「変化」の捉え方——

ヌネス・コスタ・ハイッサ

キーワード：テンス・アスペクト形式、翻訳、日葡対照

要 旨

従来の日葡対照研究では、過去の結果継続性を表すテイタ形に関して、ブラジル・ポルトガル語では「estar (pretérito imperfeito) + participio」という形式が用いられると指摘されている。しかし、「日葡対訳データベース」を通じて、テイタ形が「estar + participio」に訳されない例外的なものも確認された。そこで、本稿では、このような例外的なテイタ形を扱い、ブラジル・ポルトガル語では、過去の結果継続性を表す上でどのような形式が使われるか述べる。また、翻訳規則を作成する際に、どのような情報が必要であるかについても触れる。

1. はじめに

日本語のテンス・アスペクト体系の先行研究では、動詞の種類によって、テイル・テイタ形のアスペクト的意味が変わることが指摘されており（金田一 1950; 町田 1989; 工藤 1995）、特に、工藤（1995）によると、テイル・テイタ形のアスペクト的意味によって、日本語動詞は3つの種類に分けられるという（表1）。

表1 工藤 (1995) による日本語動詞分類

分類	テイル形のアスペクト的意味	例
主体動作・客体変化動詞	動作継続 (能動) / 結果継続 (受動)	開ける、入れる、消す
主体変化動詞	結果継続	行く、来る、集まる
主体動作動詞	動作継続 (能動・受動)	歩く、食べる、回る

表1から分かるように、基本的に日本語動詞では、主体の動作を表すか主体の変化を表すかによって、テイル・テイタ形が動作継続性を表すか結果継続性を表すかが変わる。例えば、主体の変化を表す「集まる」がテイタ形と共起する場合、そのテンス・アスペクト解釈は過去の結果継続性であると考えられる。

それに対して、ブラジル・ポルトガル語 (以下、ポルトガル語) では、動作継続性を表す形式と結果継続性を表す形式が異なる。そのため、日本語のテイル・テイタ形をポルトガル語に訳すとき、そのアスペクト的意味によって翻訳形式も変わるものと考えられる。日本語とポルトガル語の間では、このような相違点が見られるものの、この点を扱う日葡対照研究は未だ少ない。

また、従来の日葡対照研究では、変化動詞の過去の結果継続性を表すテイタ形に対して、ポルトガル語ではコピュラ動詞と過去分詞の組み合わせから作られている「*estar (pretérito imperfecto) + participio*」という複合形式がよく用いられるとされている (儀保 2014; Toffoli 2019)。但し、そもそも日本語とポルトガル語で「変化」の概念に違いが見られるかについては言及されていない。例えば、日本語では、「行く」は主体変化動詞として捉えられ、「行っていた」は基本的に過去の結果継続性として解釈されるが、ポルトガル語では、「*ir*」(行く)は「*estar (pretérito imperfecto) + participio*」と共起できない («*estava ido*」はポルトガル語では存在しない)。

本稿では、日本語とポルトガル語における過去の結果継続性を表す形式を比較するとともに、両言語における「変化」の捉え方について検討する。その際、先行研究の指摘や内省にのみ頼るのではなく、筆者が構築した「日葡対訳データベース」を用いることとし、テイタ形とその翻訳の実例を分析する。また、結果継続性を表すテイタ形をポルトガル語に訳すとき、どのような形式が用いられるかについて述べる。

2. 先行研究

儀保（2014）によると、ポルトガル語話者が日常的に使用する多種多様な形式にはアスペクト意味が含まれているにもかかわらず、大半のポルトガル語の文法書には、Aspecto（アスペクト）というカテゴリーの記述が見当たらないという。文法書ではその代わり、Tempo（テンス）、Modo（ムード）、Perífrases verbais（動詞の複合形）、Verbos auxiliares（補助動詞）の記述の中で間接的にアスペクト的用法を取り上げることが一般的であると指摘されている。そのため、日本語とポルトガル語のテンス・アスペクト体系を比較する際には、アスペクトの比較が困難になる。

このような問題を踏まえ、儀保（2014）では、日本語の各テンス・アスペクト形式に対応するポルトガル語のテンス・アスペクト形式（または表現）がまとめられている。しかし、同論においても両言語の形式の対応が具体的にどのように成立するか、未だ説明が不足している点が見られる。例えば、同論では、過去の結果継続性を表すテイタ形は、「estar (pretérito imperfeito) + participio」と対応するが、変化の概念を含まない動詞はこの形式と共起しにくいと説明されている。しかし、そもそも「変化の概念を含まない動詞」に関する説明がなく、ポルトガル語と日本語の間に「変化の概念」の捉え方の違いがあるかについても言及されていない。

日本語とポルトガル語における結果継続性を扱うもう一つの先行研究として、Toffoli（2019）が挙げられる。Toffoli（2019）では、日本語のテイル形が結果残存（工藤1995の用語では、「結果継続」というアスペクトの意味を表す場合、ポルトガル語の「estar+participio」と基本的に対応することが指摘されており（以下の(1)はその例である）、従って、ポルトガルを母語とする日本語学習者にとって結果残存を表すテイタ形は習得が比較的容易であるとされている。

- (1) 財布はあそこに落ちている (A carteira está caída ali.)

定冠詞 財布 be fall-PT あそこ

(Toffoli 2019:30 グロスは原文による)

但し、例外もあり、教育現場の経験では日本語母語話者が「結果残存のテイル」を使用する文脈で、ポルトガル語を母語とする日本語学習者が「ある／いる」を使用している場合があると説明されている。また、これはポルトガル語における定冠詞と不定冠詞の影響と関連している可能性があるとして指摘されている。

(2) あそこに財布が落ちている (Tem uma carteira caída ali.)

ある 不定冠詞 財布 fall-PT あそこ

(Toffoli 2019:31 グロスは原文による)

(2) のような例の場合、ポルトガル語では、「財布が落ちている」より、「財布がある」のような表現が用いられる傾向があるとされる。その理由について Toffoli (2019) は、ポルトガル語において、不定冠詞を用いる文であれば、存在を表す「estar」ではなく、日本語の「ある」に当たる「ter」が使われるためであると論じている。

この現象を取り上げ、Toffoli (2019) は、定・不定冠詞の影響と結果残存を表すテイル形の習得困難の原因を考察するため、アンケート調査及び文法性判断調査を試みている。その結果、不定冠詞がつく場合は「ある」の使用が、定冠詞がつく場合はタ形の使用が、それぞれ見られたと報告しており、ブラジル人学習者に日本語を教える際、ポルトガル語における冠詞の知識を活かすことによって結果残存を表すテイル形の習得がより容易になることを主張している。このように同論は、ポルトガル語の定・不定冠詞と結果継続性を表すテイル形の翻訳に関する重要な手がかりを得た先行研究であると言える。但し、同論でも変化の概念に関する説明はなされておらず、日本語とポルトガル語の過去の結果継続性の捉え方に違いがあることについても言及されていない。

以上のように先行研究では、日本語とポルトガル語における結果継続性を表す形式が挙げられているが、両言語における「変化の概念」については言及されておらず、また、日本語とポルトガル語とで、動詞の種類が異なる場合、テイタ形がどのように訳されるかについても説明されていない。そこで、本稿では、「日葡対訳データベース」から得られた実例の分析を通じて両言語における変化動詞の捉え方を調べる。

3. 調査方法

本稿では、日本語における過去の結果継続性を表すテイタ形のポルトガル語への訳し方について調べる。具体的には、日本語において「変化動詞」として捉えられる動詞のうち、ポルトガル語では「動作動詞」として捉えられるものがあるかどうか調べる。また、捉え方の違いがある場合、過去の結果継続性を表すテイタ形はどのように訳されるかについても分析する。ところで、このような分析を行う上では、日本語からポルトガル語への翻訳文が必要であるが、両言語を扱う対訳コーパスは現時点では

存在しない。そこで、筆者は日本語の書籍とそのポルトガル語訳版をもとに、「日葡対訳データベース」を構築した。このデータベースは、18の文学作品（長編小説（4編）、中編または短編小説（14編））と6の漫画本の計24作品で構成されている。また、データベースに含まれる延べ語数は、計1,650,824語である。「日葡対訳データベース」に含まれている書籍を表2に示した。

表2 日葡対訳データベースに含まれている日本の書籍

作品名	著者	出版年
イエスタデイ	村上春樹	2014
尾形了齋覚え書	芥川龍之介	1916
おぎん	芥川龍之介	1922
女のいない男たち	村上春樹	2014
カードキャプターさくら第10巻	CLAMP	1999
枯野抄	芥川龍之介	1918
木野	村上春樹	2014
戯作三昧	芥川龍之介	1917
こころ	夏目漱石	1914
古都	川端康成	1962
シェラザード	村上春樹	2014
聖闘士星矢 NEXT DIMENSION 冥王神話 第11巻	車田正美	2017
つぐみ	吉本ばなな	1989
DEATH NOTE 第6巻「交換」	大場つぐみ・小畑健	2005
独立器官	村上春樹	2014
ドライブマイカー	村上春樹	2013
ねむり	村上春樹	1989
鋼の錬金術師 第1巻	荒川弘	2002
バトルロワイアル	高見広春	1999
美少女戦士セーラームーン第1巻	武内直子	1992
奉教人の死	芥川龍之介	1918
羅生門	芥川龍之介	1915
るろうに剣心第3巻	和月伸宏	1995
藪の中	芥川龍之介	1922

本稿では、「日葡対訳データベース」を基に、過去の結果継続性を表すテイタ形が用いられている例とそのポルトガル語の訳文を比較した。

なお、テイタ形のアスペクト的意味を正確に解釈する上では、前後の文脈が必要と

思われるため、本稿では単文ではなく、複文節を分析の対象とした。特に、テンポラリティ・アスペクチュアリティが重要な役割を果たす時間を表す複文節を抽出し、その中で最も用例数の多い「トキ節」のみを調査の対象として選択した。

調査においては *Yokka Grep* と *NoEditor* という検索ソフトを使用した。具体的には、「トキ節」における結果継続性を表すテイタ形の翻訳形式を調べるために「「う、く、ぐ、す、つ、ぬ、ぶ、む、る」＋「時、とき」と否定形の「ない時、ないとき」（両方を合わせて、ル時と称する）、「た、だ」＋「時、とき」、否定形の「なかった時、なかったとき」（両方を合わせて、タ時と称する）を検索し、主節のテンス・アスペクト形式がテイタ形であるもののみを抽出した。また、抽出された例のうち、テイタ形が変化動詞と共起し、結果継続性を表している例のみを扱った。検索の結果、過去の結果継続性を表すテイタ形が用いられているトキ節は25例確認された。

4. 考察

「日葡対訳データベース」から抽出された25例の用例のうち、先行研究の指摘通りにテイタ形が「*estar* (pretérito imperfecto) + *participio*」として訳されている例は8例(32%)のみであった。そのような例では、(3)のように、両言語ともに「変化の概念」が含まれている動詞が使われている。

- (3) 私の着いた時は、家族のものが、みんな一つ家の内に集まっていた。

Quando cheguei lá, toda a família estava reunida.

とき 着く-PST-PFV¹ あそこ 家族全員 集まる-PST-RES²

(夏目漱石『こころ』、Coração (Kokoro)³)

(3)では、「集まる」という変化動詞がテイタ形と共起しており、そのアスペクト的意味は結果継続性である。ポルトガル語でも、「*reunir*」という動詞は結果継続性を表す *estar* + *participio* と共起できるため、訳文では、「*estava reunida*」という訳によって原文の過去の結果継続性が表されている。

¹ PST: past tense (過去テンス)

PFV: perfective (完成性)

² RES: resultative (結果性)

³ カッコ内では、原文の著者と作品名並びに訳版のタイトルが挙げられている。

一方で、テイタ形が「*estar* (pretérito imperfeito) + *particípio*」に訳されていない例は 17 例もあり、全体の 68%を占めていた。この結果は、日本語とポルトガル語で過去の結果継続性の捉え方または表し方に違いがあることを示唆している。例えば、(4)では、「忘れる」という主体変化動詞がテイタ形と共起しているため、「忘れていた」のテンス・アスペクト解釈は過去の結果継続性であるものの、訳文では、過去の結果継続を表す「*estar* (pretérito imperfeito) + *particípio*」が使われていない。

- (4) 先生が突然其処へ後戻りをした時、私は実際それを忘れていた。

Quando o professor retomou a questão, de repente, de fato já havia me esquecido dela.

とき 冠詞 先生 質問を後戻りする-PST-PFV 突然 実際に 既に 忘れる-PST-PRF⁴ それ

(夏目漱石『こころ』、Coração (Kokoro))

ポルトガル語でも、「*esquecer*」は変化の概念を含んでおり、「*estar* (pretérito imperfeito) + *particípio*」と共起できる動詞であるため、先行研究の指摘に従えば(4)ではテイタ形が「*estar* (pretérito imperfeito) + *particípio*」として訳される。しかし、(4)の訳文では、「忘れていた」は「*havia me esquecido*」という過去のパーフェクト性を表す *pretérito mais-que-perfeito* に訳されている。これは、ポルトガル語の *particípio* の意味と品詞・機能と関係している可能性がある。ポルトガル語の *particípio* は状態を表すものであるため、*adjetivo* (形容詞・形容動詞) として扱われることが多い⁵。また、*adjetivo* のうち、動詞の結果継続性から多少離れた意味を持つものもある。例えば、(4)で使われている「*esquecer*」(忘れる)の場合、「*estar esquecido*」は「忘れるという変化が成立し、その結果が継続している」という意味ではなく、「主体が最近物事をよく忘れる、忘れっぽい人である」という意味になることもある。このように、動詞によって *particípio* は動詞性(結果性というアスペクトを持つこと)をなくしてしまい、状態性を持つ形容詞・形容動詞性を強調することがある。そしてその場合、「*estar* + *particípio*」という複合形式を使っても、結果継続性としては捉えられず、テイタ形と同じように過去の結果性を表す形式が必要とされる(「*esquecer*」の場合は、*pretérito mais-que-perfeito* がその機能を果たす)。Ilari & Basso (2008) では、*pretérito mais-que-perfeito* は過去のパーフェクト性を表す形式であると説明されている。つまり、この形式は、過去に「設定され

⁴ PRF: perfect (パーフェクト性)

⁵ 例えば、オンライン辞書 *Caldas Aulete* でも、「*morto*」や「*esquecido*」等の *particípio* を検索すると、「*adjetivo*」という品詞が表示される。

た時点において、それよりも前に実現した運動が引き続き関わり、効力を持っていること」(工藤 1995)を表す形式であると言えよう。このように、「実現した」という点も「引き続き関わる」という点も「*estar + participio*」が表す結果性と共通しているため、「*estar + participio*」が独特な意味をもたらす動詞の場合、「効力性」を持っている *pretérito mais-que-perfeito* がテイタ形の結果継続性を表す形式として使われるものと思われる。

また、(4)のようにテイタ形が *pretérito mais-que-perfeito* として訳される例と違って、(5)のような例も確認された。

- (5) いつぞやわたしが捉え損じた時にも、やはりこの紺の水干に、打出しの太刀を佩いて居りました。

Dias atrás, quando tentei prendê-lo, mas não consegui, ele vestia a mesma roupa azul-escura e trazia _____ a mesma espada ornada de _____ detalhes metálicos.

持ってくる -PST-IPFV⁶ 冠詞 同じ 太刀 飾られた 前置詞 ディテール 金属の

(芥川龍之介『藪の中』、Dentro do Bosque)

(5)では、「佩いて居りました」という部分が「trazia」(持ってくる)⁷という過去の継続性を表すものとして訳されている。この現象は、ポルトガル語に見られる、事態をプロセスとして捉える傾向によって説明される可能性がある。ポルトガル語では、「vestir」(着る、佩く)の場合、*participio*である「vestido」が結果継続性を表すものの、その際の意味は「服を着る」という広い範囲の意味にしかない。すなわち「*estar vestido*」は「服を着ている」、つまり「裸ではない」という意味になってしまう。もし「ドレスを着ている」という狭義の「着ている」を表すのであれば、「*estar vestido*」は使われない⁸。ポルトガル語では、狭義の「着ている」を表すために、進行性を表す *passado progressivo* 或いは継続性を表す *pretérito imperfeito* が使われる。Travaglia (2006)によると、ポルトガル語には、事態を継続的に捉える傾向があるという。そのため、ポルトガル語では、あらゆる変化動詞の場合でも、進行性を表す形式を使うことが可

⁶ IPFV: imperfective (継続性)

⁷ ポルトガル語では、「太刀を佩く」に当たる表現がないため、翻訳者が「trazer」(持ってくる)という動詞を選んだ可能性がある。

⁸ 「com」という前置詞の使用によって、「*estar vestido*」という *estar+participio* の容認度が上がる可能性がある (Ele está vestido com uma camisa bonitinha 「彼はかわいいTシャツを着ている」)。しかし、そのような言い回しは頻繁に使われるものではない。

能である。また、一般的に、進行性を表す形式と共起している動詞はプロセスとして捉えられる。すなわち、変化を表す「*vestir*」が進行性を表す形式と共起する際、その解釈は「服を着て、服を脱ぐというプロセスの中にある」ということになる。従って、ポルトガル語では、「*vestir*」は時間の幅を持つプロセスとして捉えられ、進行性を表す形式と共起することは容認される。但し、その場合「(特定の) 服を着て、その服を脱ぐまでのプロセスの中にある」という意味が表され、日本語の「(特定の) 服を着ている」という解釈をもたらしてしまう。そこで、このような動詞の場合に、テイタ形が表す結果継続性をポルトガル語で伝えるために、動作継続性を表す形式が使われる。このように、動詞によって両言語では、「変化の概念」が含まれていても、その変化の表し方が異なる。日本語では、結果状態として表されるのに対して、ポルトガル語では、プロセスとして表されることもある。

さらに、以上見た (4) (5) と違う訳し方がなされているものとして、(6) のような例も確認された。

- (6) 幸いなことに映画の出来は良くて、映画館を出るとき二人とも楽しい気持ちになっていた。

Felizmente o filme era bom, e nós saímos do cinema com

幸いなことに 冠詞 映画 コピュラ動詞-PST 良いそして 私たち 出る-PST-PFV から 映画館 前置詞

uma sensação agradável.

冠詞 気持ち 楽しい

(村上春樹『イエスタデイ』Yesterday)

(6) のトキ節は複文として翻訳されていないため、主節のテイタ形のテンス・アスペクト形式の翻訳形式を分析することが不可能である。しかし、「楽しい気持ちになる」とテイタ形の共起から表される結果継続性というアスペクト的意味はポルトガル語では、「*estar + participio*」によって表すことができない。これは「なる」という動詞の性質に起因している可能性がある。「なる」という動詞は、ポルトガル語の「*ficar*」や「*tomar-se*」に訳されるが、そのいずれもコピュラとして働く動詞である。つまり、元々動詞性が低く、原則としてコピュラ動詞を使う複合形の主動詞の働きをすることができない。また、そのような場合、日本語のテイタ形が表す結果継続性の意味に対応する表現として、「コピュラ動詞 (*ser* もしくは *estar*) + nome」という文型が挙

げられる。例えば (6) における「楽しい気持ちになっていた」という部分は「estávamos felizes/contentes」という「estar+nome (adjetivo)」に訳され得る。

このように、過去の結果継続性を表すテイタ形をポルトガル語に訳す場合、翻訳パターンは(7)のように4つ考えられる。

- (7) a. Estar (pretérito imperfeito) + participípio
- b. Pretérito mais-que-perfeito
- c. Passado progressivo/ pretérito imperfeito
- d. Ser/estar (pretérito imperfeito) + nome

(7)からわかるように、ポルトガル語では、同じ過去の結果継続性を表すために、複数の形式が用いられている。この現象はポルトガル語における「変化の概念」の捉え方と関連していると思われる。まず、日本語と同じように変化の概念が含まれ、結果性を表す形式が日本語のテイタ形と同じ意味を表す場合、(3)のように、テイタ形は「estar (pretérito imperfeito) + participípio」として訳される。一方、変化を表す動詞でも、結果性の形式を使用することによって違う意味を表してしまう場合、(4)のように、テイタ形は「効力性」を表す pretérito mais-que-perfeito として訳される。また、(5)のように、変化の概念が含まれているが、その変化はプロセスとして捉えられる場合、テイタ形は動作継続性を表す形式に訳される。さらに、動詞性の低いコピュラ動詞の場合、「estar (pretérito imperfeito) + participípio」との共起が不可能であるため、テイタ形は「コピュラ動詞 (ser もしくは estar) + nome」という文型に訳される。これらの訳し方はポルトガル語では、動詞によって変化の継続性が「状態性」或いは「プロセス性」として捉えられるということを示唆している。また、動詞ごとに、その状態性を表すには結果性を持つ形式が使われたり、「効力性」を持つ形式が使われたりすることも窺える。

最後に、特筆すべき点として、日本語とポルトガル語の間に見られる、移動を表す動詞の捉え方の違いが挙げられる。(8)では、「戻る」が使われており、訳文では、Ser/estar (pretérito imperfeito) + nome が用いられている。

- (8) そして目が覚めたとき、私はもとどおりの私に戻っていた。

Quando finalmente acordei, eu era a mesma de sempre.

とき やっと 起きる-PST-PFV 私 コピュラ動詞-PST 冠詞 同じ 前置詞 いつも

(村上春樹 『ねむり』、Sono)

「戻る」に当たる「voltar」という動詞は、ポルトガル語では「ir」（行く）や「vir」（来る）と同じように移動を表す動詞である。また、このような動詞は、「estar + participio」と共起できず、結果継続性を表すために、他の形式と共起しなければならない。さらに、儀保（2014）でも指摘されているように、変化の概念を含まない動詞は「estar + participio」と共起しにくいと、「voltar」等の動詞は変化を含まないと考えられる。このように、ポルトガル語では、移動を表す動詞は主体変化動詞として捉えられず、主体動作動詞として捉えられる可能性があるということは、日本語とポルトガル語で変化の概念に違いがあることの裏付けとなる。

以上のように、結果継続性を表すテイタ形はポルトガル語に訳される場合、「estar (pretérito imperfeito) + participio」に訳され得るものと訳され得ないものとに分けられる。前者は(3)のようにテイタ形と共起する動詞が日本語でもポルトガル語でも「変化の概念」を含み、かつ「estar (pretérito imperfeito)+participio」と共起しても日本語と同じ意味を表すものである。一方で後者は、(4)(5)(6)(8)のように、日本語ではテイタ形と共起する動詞が「変化の概念」を含むが、ポルトガル語では変化の概念を含まないか、或いは、変化の概念が含まれていても「estar (pretérito imperfeito) + participio」との共起によって日本語と異なった意味が表されてしまうものである。このような情報は、日本語をポルトガル語に翻訳する場合の翻訳規則の作成に重要な手がかりを与えるものと考えられる。

5. 終わりに

本稿では、過去の結果継続性を表すテイタ形に関して、ポルトガル語ではどのような形式が使われるか述べてきた。具体的には、「日葡対訳データベース」から抽出されたテイタ形が用いられるトキ節とそのポルトガル語訳を分析した。その結果、ポルトガル語では、過去における結果継続性を表すために「estar + participio」以外に過去パーフェクト性を表す pretérito mais-que-perfeito、動作継続性を表す形式 (pretérito imperfeito と passado progressivo)、「コピュラ動詞+nome」という文型も用いられることが明らかになった。このような結果は、ポルトガル語と日本語で「変化」の捉え方に違いがあることを示唆している。例えば、本稿の分析から明らかになったように、日本語では「行く」や「戻る」等の移動動詞は主体変化動詞として捉えられるため、テイタ形と共起することによって、結果継続性を表すが、ポルトガル語では、「ir」や「voltar」は動作動詞として捉えられ、変化の概念を含まないため、結果継続性を表す

「estar + participio」と共起できない。なお、本稿での分析の結果は、従来の日葡対照研究の指摘に反しているものではなく、対訳データベースの分析によって得られた新しい情報を先行研究の知見に付け加えるものである。

また、本稿では、過去における結果継続性を表すテイタ形のみを扱い、非過去の結果継続性を表す形式は扱っていない。これらの形式に関する分析は今後の課題にした

参考文献

- Ilari, Rodolfo & Basso, Miguel (2008) O verbo. In Ilari, Rodolfo & Maria Helena de Moura Neves (eds.) *Gramática do português culto falado no Brasil, vol.2: Classes de palavras e processos de construção*. Campinas: Editora da Unicamp, pp. 163-365.
- 儀保 ルシーラ悦子 (2014) 「ブラジル・ポルトガル語のアスペクト・テンス体系－日本語のアスペクト・テンス体系との比較研究－」『ロマンス語研究』日本ロマンス語学会 47, pp. 1-10.
- 金田一 春彦 (1950) 「国語動詞の一分類」『言語研究』15, pp. 275-302.
- 工藤 真由美 (1995) 『テンス・アスペクト体系とテキスト－現代日本語の表現－』ひつじ書房.
- Toffoli, Julia (2019) 「ブラジル・ポルトガル語を母語とする日本語学習者の結果残存のテイルの使用傾向：定冠詞と不定冠詞による影響」『一橋大学国際教育交流センター紀要』(1), pp. 29-40.
- Travaglia, L.C. (2006) O aspecto verbal no português: a categoria e sua expressão. Edufu.
- 町田 健 (1989) 『日本語の時制とアスペクト』アルク.

「日葡対訳データベース」で扱った書籍

【原文】

短・中・長編小説

- 芥川龍之介 (1915) 『羅生門』Aozora Bunko <https://www.aozora.gr.jp/> (2020年10月6日確認).
- 芥川龍之介 (1916) 『尾形了齋覚え書』Aozora Bunko <https://www.aozora.gr.jp/> (2020年10月6日確認).
- 芥川龍之介 (1917) 『戯作三昧』Aozora Bunko <https://www.aozora.gr.jp/> (2020年10月6日確認).
- 芥川龍之介 (1918) 『枯野抄』Aozora Bunko <https://www.aozora.gr.jp/> (2020年10月6日確認).
- 芥川龍之介 (1918) 『奉教人の死』Aozora Bunko <https://www.aozora.gr.jp/> (2020年10月6日確認).
- 芥川龍之介 (1922) 『おぎん』Aozora Bunko <https://www.aozora.gr.jp/> (2020年10月6日確認).
- 芥川龍之介 (1922) 『藪の中』Aozora Bunko <https://www.aozora.gr.jp/> (2020年10月6日確認).

- 川端康成 (1968) 『古都』新潮社.
高見広春 (2002) 『バトルロワイアル 上』幻冬舎.
高見広春 (2002) 『バトルロワイアル 下』幻冬舎.
夏目漱石 (1914) 『こころ』Aozora Bunko <https://www.aozora.gr.jp/> (2020年10月6日確認).
村上春樹 (2010) 『ねむり』新潮社.
村上春樹 (2016) 『女のいない男たち』文藝春秋.
吉本ばなな (1992) 『つぐみ』中央公論新社.

コミック

- 荒川弘 (2002) 『鋼の錬金術師 第1巻』スクエア・エニックス
大場つぐみ・小畑健 (2005) 『DEATH NOTE 第6巻「交換」』集英社・ジャンプ・コミックス.
CLAMP (1999) 『カードキャプターさくら 第10巻』講談社.
車田正美 (2017) 『聖闘士星矢 NEXT DIMENSION 冥王神話 第11巻』秋田書店.
竹内直子 (2003) 『美少女戦士セーラームーン 第1巻』講談社.
和月伸宏 (1995) 『るろうに剣心 第3巻』ジャンプ・コミックス.

【訳文】

短・中・長編小説

- Akutagawa, Ryunosuke (2008) *Rashômon e outros contos*. Tradução de Madalena Hashimoto Cordaro e Junko Ota. Editora Hedra. 204 p.
Kawabata, Yasunari (2006) *Kyoto*. Tradução de Meiko Shimon. Editora Estação Liberdade.
Murakami, Haruki (2015) *Homens sem mulheres*. Tradução de Eunice Suenaga. Alfaguara. 240 p.
Murakami, Haruki (2015) *Sono*. Tradução de Lica Hashimoto. Editora Alfaguara.
Natsume Sôseki (2008) *Coração (Kokoro)*. Tradução Junko Ota. Editora Globo. 280 p.
Takami Koushun (2014) *Battle Royale*. Tradução de Jefferson José Teixeira. Editora Globo.
Yoshimoto, Banana (2015) *Tsugumi*. Editora estação Liberdade

コミック

- Arakawa Hiromu (2016) *Fullmetal Alchemist Volume 1*. Tradução de Luiz Octavio Kobayashi. Editora JBC.
CLAMP (2013) *Sakura Card Captor Volume 10*. Tradução de Luiz Kobayashi. Editora JBC.
Kurumada, Masami (2018) *Cavaleiros do Zodíaco Next Dimension Saga de Hades Volume 11*. Tradução de Karen Kazumi Hayashida. Editora JBC.

Ooba, Tsugumi & Obata Takeshi (2007). Death Note Volume 6 ‘Trocas’. Editora JBC

Takeuchi, Naoko (2014) Sailor Moon Volume 1. Tradução de Arnaldo Massato Oka. Editora JBC.

Watsuki, Nobuhiro (2013) Samurai X Volume 3. Editora JBC.

ヌネス・コスタ・ハイッサ／人文社会科学研究科
(2020年9月9日受理)